

類似文型の比較研究：“吃饭去”と“进门去”， “让学生背课文”と“把书放在桌子上”

Wu, Niansheng / 吳, 念聖

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

95

(開始ページ / Start Page)

189

(終了ページ / End Page)

202

(発行年 / Year)

1996-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004761>

類似文型の比較研究

——“吃饭去”と“进门去”、“让学生背课文”と“把书放在桌子上”——

呉 念 聖

副題の如く、文型上、似通った中国語表現がある。そのようなものを、小論においては、とくに文型を表層構造(surface structure)の意味としてとらえるという視点から、類似文型と称する。

これまでの諸研究に鑑みながら、類似文型の類似性をもう少し見つめてみようというのが小論の立脚点である。文の意味や言語環境を軽んじてはならないが、文法研究の基本はやはり構造である。中国語を知るには、いわゆる短語(phase)の角度から文型を細分する作業は役立つが、既成文型を横断して基礎単位の詞(word)、とりわけ動詞の機能を探究するのも不可欠であろう。

—

1. “吃饭去”と“进门去”

この二文を、筆者は類似文型と称する。が、今は一般に、全く違った文型としてとらえている。つまり、前者を連動式的一种として認識するが、後者を連動式としてでなく、動補式として見なしている。⁽¹⁾

しかしなばら“吃饭去”と“进门去”とは表層構造が似ているには違いない。それならば文法上の共通点もあるはずだ。では、その共通点はいったいなんであろう。共通点をしっかりと把握したうえで、その相違点もあらためて確かめてみたい。

2.1 “吃饭去”と“去吃饭”

まずこの二文を比較してみよう。両者は意味が同じ、とちらも連動式だというのは大方の認識である。⁽²⁾

ただ、両者の表現の重点がちよっと違うという意見もある。例えば、傳田

章氏は、“我刚才寄信去了。”の表現の重点は“去”にあり、“我去买杂志了”の表現重点は“买杂志”にあると指摘している。(『改訂版中国語Ⅱ＝基礎の文法その②＝』p. 24～25 日本放送出版協会 1993年)

筆者の場合は、その両者の表層構造の異に注目する。その異なりはいうまでもなく、“吃饭”と“去”との順番である。

深層構造(deep structure)を説く立場から見れば、両者の位置が変わっても相互関係は変わらないというが、しかし筆者は表現層構造にこだわり、その語順を重んじる。よって次の点を強調したい。

“去”が先にくる場合、文は“去食堂吃饭”にふくらませることができる。ところで“去”が後にくると場所目的語は取ることができない。つまり“去”は位置によってその機能が違って来る。さらに、構造上の異が、意味を表す可能性の異ももたらしているともいえるのだ。

したがって、現在、この両者を同じ目的を表す連動文の一類型に帰する分類法は、文の表層構造に基づくものではない。⁽³⁾

2.2 “去吃饭去”も一緒にあわせてみる

“去”の二度使いには、制限がある。目的を表す動詞があれば(その動詞の目的語があってもなくてもよいが)二度使える。例えば“去吃去”あるいは“去玩去”。

もし“去”の後に場所目的語がつくならば、ただちにもう一度“去”を用いることはできない。例えば、“去食堂去”または“去朋友家去”は普通はいわない。もちろん“去朋友家去玩去”ならよろしい。

まとめてみれば、いわゆる動作の目的を表現する連動文は三つのパターンがある、

去玩。

去玩去。

去玩去。

では“去玩”、“去玩去”のそれぞれと“去玩去”との関係はどのようなものであろう。

範曉氏は、後ろの“去”を軽声で発音し、“去玩去”が“去玩”の目的強調式であると指摘する。(《汉语的短语》p. 136 商务印书馆 1991年)

筆者はそれに同意する。そして逆にいわせていただければ、“去玩”は“去玩去”の非強調式ともいえる。

思うに、この種の連動文の基本パターン、あるいはそれを深層構造といっ

たほうがいいかもしれないがは、“去玩”ではないだろうか。文の表現の順序としては、まず“去”のような方向動詞があってそれからその動作の目的を表す“玩”のような動詞があるのである。表現の重点あるいは語り手の関心は“去”から“玩”に移っていく。たとえ“去玩”という形で表されていても、“去”が先行であり“玩”が後続であって表現重点であることに変わりはない。

そこで、筆者は表層構造の面から、“去玩”は“去玩去”の略式であるという仮説を立てる。そのうえで、“玩”の後ろにおく“去”を位置づけたいのである。

文中で述語をつとめる動詞が省略されることは、中国語の中ではめずらしいことではない。例えば、“他写字写得很好”を“他字写得很好”にするように、最初の“写”を省略する。それはレトリック上の要請であろう。ただ文の構造を分析する時は、もとの形にもどさねばならない。

2.3 “去朋友家去玩”と“到朋友家去玩”

前にある“去”は“到”で換えられる。あるいは、“到朋友家去玩去”とも表現できる。

では“到”の使い方をちょっと見てみよう。

“到朋友家去。”（友達の家に行く）

ここの“到”は通常、前置詞としてとらえられている。“去”で入れ換えることはできないが、“去朋友家”とは同じ意味である。

ただ“到朋友家了”なら、“到”は動詞として見なされ、意味も「着く」「到着する」となるので、文の意味は「友達の家に着いた」となる。⁽⁴⁾

2.4 二つの“去”

結局、連動式の中で先にくる“去”は、目的を表す動詞を導き出すという役目を果たし、それによって文を完結させるのである。そういう意味で、ここの“去”は一種の不完全動詞ともいえよう。

筆者は小論において、広義的に（便宜的にというべきか）、名詞などを後続させないと文を完結させることができない動詞を不完全動詞と呼ぶことにしている。

不完全動詞という用語は中国語文法の範囲内ではあまり使わないが、いわゆる同動詞(covreb)の意味として受けとめていただければよろしいと思う。むろん、同動詞といえは、“是”“有”“在”などはよく挙げられるが、“去”

は普通、その範囲に入らない。

場所目的語を取るのは方向動詞“去”としての機能ではあるが、必ずしも取らねばならないというわけではない。⁽⁵⁾

実は、場所目的語は一種の特殊目的語である。一般の施事動詞の対象(object)とは性格が違う。例えば“他打我了”を“我被他打了”に書き換えられるが、“她去中国了”を“中国被她去了”に書き換えはれない。それが“去”のような自動詞兼方向動詞の性格によるものである。

もし目的語の概念をより広くとらえるならば、目的を表す動詞も“去”の目的語として認められるかもしれない。⁽⁶⁾

一方では、連動文の中で後につく“去”は、目的を表す動詞を取れないばかりか、場所目的語を取るという機能も失っている。ただ目的を表す動詞に付随する形で登場するので、意味上ではもし先に“去”があればそれと重複する嫌いさえも免れない。

もしも“玩去”は“去玩去”の略式という認識が立つならば、後の“去”はまさしく一種の形式用言である。あるいはそれを方向補語と呼ぶこともできるかもしれない。⁽⁷⁾

3.1 “进去”、“进门去”と“走进去”、“走进门去”

“进去”と“走进去”とは動補式だと認識されている。一般では、前者において“去”を補語・単純方向補語といい、後者において“进去”を補語・複雑方向補語という。ただ後者の場合、場所目的語を取る時はその目的語が“进”の後につけねばならない。つまり、目的語を取ると方向補語の“进去”が割れた形になる。

ここでは、目的語を取ったのは“进”である。“走”も“去”も目的語を取ることができない。

小論では、この方向動詞の“进”も一種の不完全動詞だと見ている。つまり“进”は目的語を取らず、あるいは“去”か“来”を後続させないと完結できないのである。“他进”や“他进了”という表現は成り立たない。

ただ“请进!”のような命令文は例外に属する。

目的語の有無で“去”の役割も違ってくる。目的語があれば、主観方向(語り手を基準に)を示すだけであるが、目的語がなければ、さらに文を完結させるという役もはたしている。

では“走”と“进”とはどのような関係であるだろう。後者は前者の補語であると同時に、その結果か目的でもある。そういう意味で、“去玩”におけ

る“去”と“玩”との関係に似ている。

3.2 “进”と“到”

“到公園玩去”の“到”は前置詞としてとらえられよう。

ここの“到”は“去”で置き換えることができる。かりに、この“到”を動詞としてとらえるならば、“进”のような一種の不完全動詞として見なすこともできるかもしれない。しかし“到”は“进”よりもきびしい条件つきで使用されており、必ず場所目的語を取り、かつ“去”か“来”を後続させねばならないのである。どちらを欠いてもだめである。“到公園”も“到去”も成立しない。

4. まとめ

ここでは、いわゆる方向動詞とその目的を表す動詞を用いた連動式と方向補語を用いた動補式との表現可能パターンを整理してみる。それぞれに、“去朋友家玩牌”と“走进门去”を例にする。いずれも動詞の複数使用を条件とする。

〈表1〉

去	朋友家	玩	牌	去	V1	O1	V2	O2	V3	
去		玩			V1	→	V2			
去		玩	去		V1	→	V2	/	V3	
		玩	去				V2	↔	V3	
去		玩	牌		V1	→	V2	→	O2	
去		玩	牌	去	V1	→	V2	→	O2 / V3	
		玩	牌	去			V2	→	O2	
去	朋友家		去						V3	
					(普通使わない)					
去	朋友家	玩			V1	→	O1	↘	V2	
去	朋友家	玩	牌		V1	→	O1	↘	V2	
									→	O2
去	朋友家	玩	去		V1	→	O1	↘	V2	
									/	V3
去	朋友家	玩	牌	去	V1	→	O1	↘	V2	
									→	O2 / V3

〈表2〉

走	进 门 去	V1	V2	O2	V3
	进 去		V2	→	V3
	进 门 去		V2	→ O2	/ V3
走	去	V1	→		V3
走	进	V1	→ V2	〈未完成〉	
走	进 门	V1	→ V2	→ O2	
走	进 去	V1	→ V2	/	V3
走	进 门 去	V1	→ V2	→ O2	/ V3

二つの表を比べると、次のいくつかの啓発を受けられよう。

① 表2のように“走进”を動補式として見るならば、表1の“去玩”も同様に見なすことができよう。あるいは逆に“走进”を“去玩”と同様に連動文として見なすこともできるかもしれない。V2はV1の結果であれ、目的であれ、同一視すべきではなからうか。

ただ移動動詞“走”は、方向動詞“去”のように場所目的語を取ることはできない。

② どちらのV2も目的語が取れる。

しかし、施事動詞“玩”と違って、客観方向(語り手を基準にせず)動詞“进”は場所目的語しか取れず、しかも場所目的語か、あるいは主観方向動詞の“去”か“来”を後続させないと文は完結できない。

③ 表2のV3に位置する“去”は実意をもっていないようである。“进去”の場合、“去”は“进”の方向補語といわれるが、主観方向を表現するにほかなにもものでもない。

“走进去”の場合も同じ、一口で“进去”が“走”の方向補語といっているが、“进”と“去”の働きはまるきり違う。前者は客観方向を表すのみならず、実際に動作もする。後者はただ主観方向を表すだけである。

表1のV3の“去”も類似する。ただV1がない時は、V3の“去”も意味の一端を担っている。その構文を、V1が省略されているという説を取るならば、V3の“去”に対する認識は統一されよう。つまり、文末の“去”は実意をもたず、語り手を基準とする主観方向を表現するのみである。ただし、場合によって、文を完結させる機能も果たしている。⁶⁾

二

1. 老师 让 学生 背 课文。

S1 + V1 + O1/S2 + V2 + O2

哥哥 把 书 放 在 桌子上。

S1 + 把 + O1/S2 + V1 + V2 + O2

この二文について、まず次のような分析が多く見られる。

後動詞V2(以下はV2と略称)の意味上の主語S2(動作の送り手)はその文の主語S1ではなく、目的語O1である。つまり、“背”をするのは“老师”ではなく“学生”であり、そして同じように“在”の意味上の主語も“哥哥”ではなく“书”である。ここでは、“学生”も“书”も一種の兼語と認められる。

しかし現在、一般には、前者を兼語文として見なすが、後者を兼語文として認めない。⁽⁹⁾

2. 兼語を用いた兼語文——使役文

兼語文の構造について、範曉氏は次の例文、

请 他 来

V1 + N + V2

を重層構文の立場から

(请 他) 来

(V1 + N) + V2

というように分析している。

V1とNと、(V1+N)とV2とは直接な関係をもち、NとV2とは間接な関係をしかもっていない。V2は(V1+N)を補充し説明する成分である。NとV2とを取って形成された主述関係は、間接成分の深層に潜在する文法関係である。表層に顕在する文法関係の上では、NはV1の目的語のみであってV2の主語にはならない。そこで氏は、兼語構造は一種の、動目構造が述語となる特殊な述補構造であるともいえるという。(《汉语的短语》p.122~123)

範曉氏よりもっとすっきりした見解もある。例えば傅田章氏は、兼語文という用語を使わず、このV2を動詞句目的補語と称している。(『改訂版中国語 I = 基礎の文法その①』p.124-125 日本放送出版協会 1993年)

実は類似する見解はかなり以前にもあった。例えば、黎錦熙氏はV2を“宾

语的足語”（《汉语语法教材 第一編 基础規律》p.240 商务印书馆 1957年）と呼んでおり、また張志公氏はそれを“谓语的延伸”（《汉语知识》人民教育出版社 1959年）といていた。兼語文のほうがむしろはやりである。

さて、表層構造の立場から、

老师 让 学生 背 课文。

S1 + V1 + O1 + V2 + O2

をあらためてみると、“学生”はあくまでも“让”の目的語であり、“背”の主語にはならないのである。

しかし、“背”がないと文は未完成となる。それはなぜか。

原因は“让”の性格にあると思う。“让”は一種の不完全他動詞であるがゆえ、使役の対象を取るのみならず、その対象になにをさせたいという目的を表す動詞を使役対象の後に付随させねば文は完結しないのである。口語の中では使役対象が省略される時もあるが、使役対象に科する目的動詞は絶対不可欠なのだ。

むろん“让”のような、V1をつとめられるものはわりあいに限られている。

3.1 兼語を用いた非兼語文——処置文

もしも、

哥哥 把 书 放 在 桌子上。

S1 + 把 + O1/S2 + V1 + V2 + O2

を、

哥哥 放 书 在 桌子上。

S1 + V1 + O1/S2 + V2 + O2

に変換することができれば、それが

老师 让 学生 背 课文。

S1 + V1 + O1/S2 + V2 + O2

とは構造上、酷似することになる。残念ながら、現代中国語の範疇では、このような変換はできない。

しかし古代中国語の表現の中では、

放 之 四 海 皆 真 理。(それをどこにおいてもそれが真理だ)

V1 + O1/S2 + O2 + ad. + O3

というような構文はある。

“之”と“四海”の間に“于”を入れることも可能である。逆にここには“于”

が省略されているとも考えられる。

その点について“哥哥把书放在桌子上”も同じ、“在”を略して“哥哥把书放桌子上”ともいう。

では、“哥哥放书在桌子上”はなぜいえない。その原因はまずV1の“放”にある。“放”は目的語必須という意味でまだ不完全他動詞といえるかもしれないが、しかし“让”のように目的語の後にさらに動詞み取るという性格を今もっていない。“哥哥放书。”で文はもう終了する。

したがって、一文でその“放”という動作の結果をも表現しようとすれば、他の手段(文型)を使わねばならない。そこで“把”が登場してくる。

3.2 “把”

“把”はたいん特殊な詞である。現在の学界では、多数はそれを前置詞と見、少数はそれを同動詞と呼ぶ(例えば、李英哲ら編著《实用汉语参考语法》p.96 北京语言学院出版社 1990年)。

とりあらずここではそれを前置詞と呼ぼう。ただ他の前置詞と比べ、使用条件が一つ多い。多くの前置詞はその後に置く名詞とあわせて前置詞構造となり、連用修飾語のようにその後の動詞を修飾し、完結文を形作る。例えば、

从北京来。

对她说。

比弟弟高。

のような構文である。

しかし“把”を前に置き、名詞そして意味の上ではその名詞を目的語として取る動詞を従えるだけでは文はまだ完結しないのである。例えば、“把衣服补”のような表現は未完成である。それはなによりもまず構造上の未完成を意味する。意味だけを見るなら、“把衣服补”は表現できる“补衣服”と同じなのだ。

“放”のような、V1に位置する動詞の輻射範囲の萎縮によって登場した“把”は、その影響を相当広範囲に及ぼしている。多くの場合、もう一つの動作の結果を表す動詞か形容詞を後続させ、場合によってその動詞もさらに場所目的語を取る。または動詞を繰り返させ、少なくとも“了”を用いねば文はおちつかないのである。例えば、

把衣服补好。

把衣服放在桌子上。

把衣服洗洗。

把衣服洗了。

そのためか、“把”構文は処置文という名を得ている。もう少し解説すれば、“把”を使うと、必ずその対象に対し、如何にするかだけでなく、する結果もつづけて表現するということになる。

3.3 “在”

行為の結果を表すいわゆる結果補語につとまる動詞または形容詞は何百もあるが、その中では結果の場所(帰着点)を導き出す動詞(それが前置詞だという意見もある)は非常に数少ない。その中、“在”はよく使うものである。⁽¹⁰⁾ “把”を使うととうぜん、“在”は他動詞につく。そして“在”は場所目的語を取ってその他動詞の意味上の目的語の場所を示すことになる。

ところで“把”がなくても、“在”は同様な役を果たす。

哥哥 把 书 放(在) 桌子上。

S1 + 把 + O1/S2 + V1(+V2) + O2

书 (放)在 桌子上。

O1/S2 + V1(+V2) + O2

我 (生)在 南京。

S1 + V1+V2 + O2

つまりいわゆる結果補語の“在”は、“把”の有無にかかわらず、つねにその前の名詞の居所を導く役をつとめる。

この三例の中、前二例とも“书”の現在位置こそ語り手の最大関心事であると思われるが、しかし構造上では前者は口語の中で“在”を省略でき、後者は“放”を使わなくても文は成立する。結局、前者の場合は、“放”という詞が“在”の機能も潜在的にもっていると考えられる。後者の場合は、“放”の有無は文の完結に影響しないが、文の構造そしてその意味を異にしている。“放”がなければ、単に“书”の現在の存在場所を表現しただけで、どのようにして現場所にもたされたかはいっさい語っていない。

三番目の例も同じように、自動詞“生”がなくても文は成立するが、しかし構造も意味もそれのあるのと違う。

そして、S2の立場からみれば、“在”の前の他動詞V1は受身式となる。⁽¹¹⁾

3.4 “放”のもう一面

もし“书”に数量を加えて、例えば

哥哥 把 一本书 放(在) 桌子上

S1 + 把 + O1/S2 + V1(+V2) + O2

なら、それを、

哥哥 放 桌子上 一本书。

S + V + O1 + O2

に変換することができる。

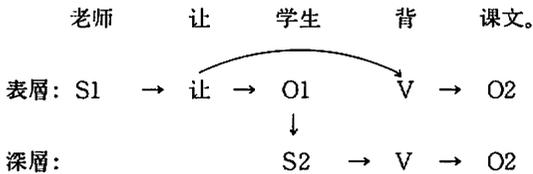
馬慶株氏は、ここの“桌子上”を“一本书”とあわせて「处所双宾语」と称している。(〈现代汉语的双宾语构造〉北京大学《语言学论丛》第十辑 1982年)

明らかに、二重目的語を取れるのは“放”の仕業である。ただここには兼語が介在しないので、検討するのを別の機会に譲ろう。

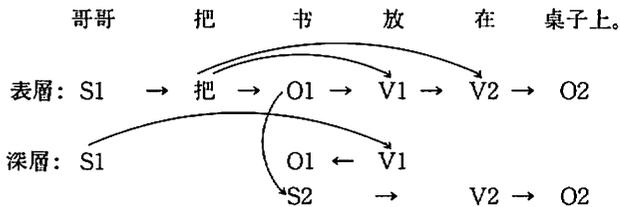
4. まとめ

表層と深層に分けてもう一度次の二文を解剖している、

〈表1〉



〈表2〉



① 表1の表層の要をなしているのは第一動詞“让”である。表2の表層の核は“把”である。“把”は前置詞か同動詞かという問題はさておいて、その位置は表1の“让”と同じである。まさにこの二語がその後の詞を統御しており、述部の性格を規定しているといっても過言ではない。

② 兼語という用語は二層にまたがり、表層で目的語をつとめながらも、深層(その実、意味)においてはその目的語を取る動詞の結果か目的を表す動詞の主語にも扮する。それゆえ、兼語式ないし連動式不要という意見もあった。⁽¹²⁾ ふるい意見ではあるが、再度検討する意義があるとわたしは思う。

〈注〉

- (1) 例えば、劉月華氏は、文末の“来”と“去”が方向補語であるかそれとも連動文の第二動詞であるかについては、区分基準をあげている。(「关于趋向补语“来”、“去”的几个问题」『语言教学与研究』1980年第3期)。
- (2) 例えば、丁声樹氏は次のように述べている、
“去”字可以在动词结构前头，也可以在后头，也可以前后都用。例如：
我去买菜。
我买菜去。
我去买菜去。
这三句话意思相同。(《现代汉语语法讲话》p.113 商务印书馆 1961年)。
- (3) 連動文の類型について、いくつかの意見が出されているが、今だに整理整頓中である。難点はその分類基準の不一致である。吳启主《连动句・兼语句》p.54-63 (人民教育出版社 1990年)を参照。
- (4) “到”と“去”の違いについて、菱沼透「“来”“去”と“到”」(『明治大学教養論集・外国語外国文学』255号 1993年)に詳細な考察がある。
- (5) ただ場所目的語が取れない(取らないという意味ではない)“去”“来”もある。例えば、“需要我们去学习、去研究。”“我来搬。”の中の“去”“来”はそうである。ただその時の“去”“来”は方向機能をもたず、全く形式化されたのでそのような文を連動文として見ないという意見もある。(范晓《汉语的短语》p.136-137)。
- (6) 非名詞性の目的語を認める見解はある。蔡文兰〈带非名词性宾语的动词〉(《句型 and 动词》语文出版社 1987年)を参照。
- (7) その点について劉月華氏ははっきり否定している。注(1)を参照。
- (8) “走着去”の場合の“去”をどう見るのか。普通はこの構文を連動式の一類型として見ている。前動詞が後動詞の手段か方式であり、後動詞の“去”は強く発音される。日本語になおす時も“歩いて行く”または“徒歩で行く”ともいえる。よってこの構文を連動よりも修飾と被修飾の関係だと見る者も少なくない。そうすればこの“去”は実意をもつ方向動詞と考えられよう。
- (9) 例えば、吳啓主氏が“兼语式的同形格式还有‘被’字句和‘把’字句格式。认清这

些同形格式的特点，把它们从兼语式中排除出来，剩下的才是兼语式。”と述べている。(《连动句·兼语句》p.76 注(4)を参照。)

(10) 拙論『動詞後の「在」について』(早稲田大学語学教育研究所「ILT NEWS」91号 1992年3月)を参照。

(11) 受身文を一種の特殊な兼語文として見る意見もあった。例えば、次の例をこう分析する、

他 被 老师 骂 了。

S1 + V1 + O/S2 + V2

むろん、“被”を動詞(同動詞とか次動詞とかいろな言い方がある)としてみるものが立論の前提である。(《现代汉语语法讲话》p.119 注(2)を参照。)

(12) 吕冀平〈两个平面，两种性质：词组和句子的分析〉(《学习与探索》1979年第4期)を参照。